

2014年度「長良川河口域環境観察会」報告

今年の最高気温が各地で観測された好天の5月25日、午前は2隻の船に乗って、午後は長良川、揖斐川、木曽川に沿って岸边から川の様子を観察しました。

河口堰周辺の観察会は2010年度から5回目、ヨシ原観察会は3回目になります。講師は粕谷志郎当会代表と元長良川下流域生物相調査団の千藤克彦さん。参加者は小さな子どもさん連れの家族を含め20名でした。

河口堰周辺

河口から同じ距離の4キロ地点の揖斐川と長良川、河口堰のすぐ上流6キロ地点の3ヶ所で川底の泥を採取して観察しました。揖斐川(水深2.3m)は川の流れが早く、底質はさらさらした砂地で小さなシジミが7個、酸化還元電位+126mvでした。長良川(水深3.0m)は流れがかなり遅く、底質は黒いヌルヌルしたヘドロ状で、貝1個。酸化還元電位-226mvで違いは歴然でした。

ゲートをくぐり堰のすぐ上流、6キロ地点(水深4.9m)はヘドロっぽい砂、貝無し、酸化還元電位-94mvでした。水質を改善するために堰のゲートのフラッシュ操作回数は以前の3倍(24年度は141回)に増やしたと報告されていますが、長良川の水質は良くなっているようには見えませんでした。

昨年(2013年)の5月11日の観察会の時は、堰下流は一面黄色をおびた白い泡でおおわれ、緑色がかかった藻のようなものが混じり、辺りの空気は生臭く感じられました。今年は昨年ほどではありませんでしたが、あちこちで黄色がかかった泡がみられました。船頭さんの話では、夏場や水量の少ない冬場にも昨年のような光景はよく見られるとのことでした。

ヨシ原

船から河口堰の上流の長良川と揖斐川のヨシ原を観察しました。

長良川の堰上流のかつて最大のヨシ原は9割以上失われたと言われています。昨年より一層少なくなったように思われました。国土交通省・水資源機構によって植栽されたヨシもほとんど今ではなくなっています。

河口堰の下流から赤須賀漁港のあるあたりまで、長良川と揖斐川の間には、かつては大きなヨシ山がありました。地元の人達には「十万山」と呼ばれていたそうです。そのヨシ山が年々小さくなっています。堰の影響で水の流れが変わり、どんどんえぐられているとのこと。

かつて長島町の大島漁協の漁師だったという船頭さんの話では、この辺りでは昭和40年代50年代にはハゼ、ボラ、セイゴなどがたくさんとれたとのこと。当時は堰周辺には魚の絶好の生殖繁殖の場であるたくさんのヨシ山があったそうですが、それらは浚渫や地盤沈下ですっかりなくなってしまい漁協も解散。捨てられずに保管していた白魚をとった網などを保存してもらいたいと鳥羽の海の博物館にお願いしているところだといひます。

カニ採取

午後は、川中堤防をはさんだ河口から約9.5キロの同じ地点の揖斐川と長良川で、それぞれ5分間、参加者全員でカニを採集しました。

揖斐川はヨシ原が広がり足下は柔らかい湿地で、数ミリの採りにくい位の小さいモノから4～5センチの大きなものまで次々とカニが見つかりました。大小54匹のクロベンケイガニ、ベンケイガニ(赤い)を採集。

長良川は堤防道路から水辺近くまで草地になっており、植生もヨシに似たオギやノイバラ、上流部でも見られるオニグルミなどが増えています。水際に僅かに残ったヨシの根元でかなり大きな4～5センチのカニを15匹採集することができました。

千藤先生の解説では、長良川の大きなカニは揖斐川から移動したものではないかとのこと。カニは6月頃水辺で産卵し、その幼生が引き潮に乗って海域に達し、そこで成長し、上げ潮にのって河川感潮域に着底するため、潮の流れが堰で遮断されている長良川では生育できません。家族で参加された6歳の子どもさんが目を輝かせて5匹のカニを家へ持ち帰りました。

浚渫工事

千本松原の下流右岸では大規模な浚渫工事が行われていました。この辺りもかつては広大なヨシ原でした。この工事は平成25年度からからはじまり、25年度は約2万m³浚渫、費用は約2億1千万円とのこと(岐阜県長良川河口堰調査検討会の資料による)。今後どのような計画で継続されるのでしょうか？

木曾川右岸・木曾三川公園(河口から約14km)のワンド

千本松原のすぐ東、木曾川右岸の川辺で観察。ここは かなり大きなワンド(湾処)になったところで、長良川では今では見られなくなったサンカクイ、マコモなどの多様な植物が見られました。木曾川には上流にたくさんダム群があるにも関わらず、長良川と比べるとこの辺りでは自然な美しい水辺の風景が広がりほっとしました。いい天気の日休みのためか河原はバーベキューやボール遊びを楽しむ若者達や家族連れで一杯でした。

(報告:田中万寿)

昨年様子はこのTOPICS欄のはじめの方を参照してください。